たところであると伝えられている。王直が五島や平戸を根拠としたのは、平戸領主松浦氏の勧誘があったのと、明の雙嶼攻撃により、嘉靖二七年（一五八四、天文一七）に許兄弟が没落し、ここで平穏な取引が出来なくなり、おだやかな密貿易のできる場所を王直が求めていたからであろう。王直がはじめて日本に来た年代は、日本側の史料（『鉄炮記』）では、天文一二年（一五四三）であり、中国側史料（『日本一鑑』）では嘉靖二四年（一五四五）である。今年の夏、平戸市で九歴協研究大会の巡検で松浦資料館を訪れたが、ここに展示されていた年表では、王直が平戸にはじめてきたのは、天文一一年（一五四二）とはっきりと記載されていた。不可思議には思ったが、その根拠・出典を確かめることが出来なかったことは残念であった。天文一二年（一五四三）ポルトガル人を乗せて種子島に着いた船もポルトガル船ではなく、彼の支配下にあった中国の密貿易船であったと思われる。司馬遼太郎氏は、その著『街道を行く』で、南浦文之の『鉄炮記』のなかの儒生五峰は王直のことであり、種子島に漂着した異国船は、王直がチャーターしたポルトガル船だと書いている（肥前道　平戸の項）。

註七　文禄四年（一五九五）領主時久は薩摩の祁答院（現鹿児島県宮之城）に所領替えになったとき、文禄四年、秀吉の命により薩摩祁答院三万九千石に改易転封された。都城は伊集院忠棟（幸侃）の所領となる。

註八　新地移り　元和一五年一国一城の令が発布されたことにより、忠能は城を下り新地（現在都城市役所所在地）に邸宅を造営してここに移った。このことを当地では新地移りと言っている。

註九　内之浦は古くから海上交通の要地であり、南方との交通も繁く、内之浦は古くから南方海上交通の要衝であったと思われる。戦国初期の一五世紀の中頃、周防の大内氏と室町幕府との関係悪化から、幕府の遣明船は関門海峡を避けて泉州堺から、四国の南をとおり、日向の海岸を経て、鹿児島の坊津から渡航するようになった。明国船もこの航路を利用した。よって、国際都市として堺が発展期に入るとともにこの航路に沿う日向の諸港も賑わってきたと思われる。《参考資料》『角川日本地名大辞典45宮崎県』串間市一木。『角川日本地名大辞典46鹿児島県』内之浦町。『毎日新聞一九八九年七月三十日』「東洋のベニス堺」（筆者　岡本健一毎日新聞論説委員）。

註十　住吉原　国合原とも言う。住吉山の裏側から平松城に至る台地で、ここは日向国と大隅国の境でもあったので、国合原と言う。住吉原の戦については、日向国史上巻八四三ページ参照。

註十一　伊集院忠棟の所領となったが、その没落後　慶長四年（一五九九）三月九日京都伏見の島津邸で伊集院忠棟（幸侃）は宗家島津忠恒によって謀殺された。この知らせを聞いた幸侃の子忠真は島津氏に対抗して戦いを起こすが、翌五年鎮定された（所謂　荘内の乱）。

註十二　京都出発　京都出発年代は太田青丘氏の『藤原惺窩』吉川弘文館による。（薩南紀行日誌には出発月名のみ記載されており、年代は残っていない。）

（都城商業高等学校教諭）

外海町のド・ロ神父記念館

後藤　重巳

角力灘の荒波が打寄せる長崎県西彼杵郡外海（そとめ）町出津（しつ）の高台に、外海町立民俗資料館とド・ロ神父記念館が開設されている。

キリスト教が日本に伝えられた頃、この地方は、いち早くその洗礼を受けてキリシタンが多かったため、禁教後も地下に潜伏した所謂「かくれキリシタン」が少なくなく、その遺跡や遺品が多く残されている。資料館の展示品の内にも、「オラショ」をはじめ、キリシタン関係の文書や遺品が多く見られ、在りし日のキリシタンたちの姿を彷彿させるものがある。

昭和四三年に開館された町立ド・ロ神父記念館は、慶応四年（一八六八）、長崎へ渡来し、以降、出津の教会を中心に布教と社会福祉活動に生涯を捧げたフランス生まれの神父マルコ・マリ・ド・ロの功績を記念すべく建設された施設である。

明治十二年、出津教会の主任司祭になったド・ロは、十四年に青年教育所を開設、十六年には、救助院を開き、パン・マカロニー・ソーメンや織物などの授産事業に着手し、十七年には、村内の原野の開拓を始めた。

生産性が低く、貧困を極めている地域の人々を厚生するために、ド・ロは、さらに事業を広げ、十八年には、イワシ網漉き工場・保育所・水車利用の製粉工場を開設、砥石崎に防波堤を築くなどしている。

大正三年（一九一四）十一月、長崎で死去するまで、ド・ロは、貧民救済のために、土地購入・農民の開拓移住・道路の改修工事・製茶工場さては、共同墓地の開設などにまで力を注いで地域住民の福祉厚生に全精根を尽くした。

ド・ロが設計建設した出津教会・大野教会は、ともに長崎県の重要文化財に指定されており、十八年に開

設された保育所が、神父記念館そのもので、現在、県の指定文化財となっている。彼が外海に赴任する以前に長崎大浦に建設した神学校は、現在、国の重要文化財に指定されている。

ド・ロ神父記念館の展示物は、ド・ロ神父がこよなく愛用した日常用品をはじめ、宗教関係の資料・医療用具などのほか、大工左官道具・設計工学書、産業関係では、マカロニー・ソーメン製造用器械・メリヤス編機・ミシンなどであり、参観者をして感動せしめるものがある。

展示品そのものについては、一見したところでは、懐中時計をはじめ、さして「古い物」と言う印象は与えまい。しかし、この記念館には、その外観を含めて、ド・ロ神父の生きざまが生々しく描きだされている。博物館・資料館とは、かくあるべきものであろう。戦国時代末期と明治時代中期とでは、大きな時間的な開きがあるとは言え、日本におけるキリスト教の布教に際し、社会福祉の理念が大きく掲げられていた問題を忘れてはなるまい。

因みに、ド・ロ神父渡来の主な目的は、日本に石版印刷技術を伝えることにあったといわれ、彼は、渡来の年には、早くも大浦天主堂内に、石版印刷所を開設している。

出津の二つの資料館を参観して、惜しむらく感じたのは、この二館の歴史的関連が、出津と言う風土の中で生かされていないと言うことであった。そこには、専門職員としての学芸員がいないと言うやや悲しい現実があるのではあるまいか。それにしても、ド・ロ神父記念館は、一見しておくべき施設であろう。

（文学部　教授）

大神系図と豊後佐伯氏について

森　行猛

天平神護二年（七六六）十月二日、『續日本紀』に「無位大神朝臣田麻呂に外従五位下を授け豊後員外掾と為す」とあるのが、豊後における大神氏の初見であり、神護景雲元年（七六七）八月十一日「従五位下佐伯宿禰久良麻呂を豊後介と為す」とあるのが、豊後における佐伯氏の初見である。

天慶二年（九三九）冬より、東西の国々に内乱が相次いで起こった。翌三年（九四〇）、東国の平将門は討ち死した。さらに翌四年（九四一）南海の藤原純友も捕殺された。しかし、その次将藤原文元と佐伯是基らは討滅の日、類を率いて遁脱し、ひそかに伊予国に入って海辺の郡に害を与えたという。八月十七・十八の両日、賊徒が大宰府管内の日向国に襲来し、合戦となった。戦いは官軍に利あり、藤原貞包は、賊を討殺するうち西国の賊首藤原純友の次将佐伯是基を生け捕ったという。九月六日、賊徒が豊後国海部郡佐伯院に襲来し、申時から酉刻にいたるまで合戦し、賊首桑原生行を生け捕りにし、賊徒を撃殺して馬船絹綿戎具雑物を鹵獲した。翌七日、合戦日記を相副えて、大宰府に進送した。桑原生行は合戦の日に数力所疵つけられたが、わずかに存命していた。八日、桑原生行は、大宰府に護送するために拘禁していたところついに死んでしまった。十六日、豊後国解が大宰府に到来し、追討凶賊使権少弐源朝臣経基は、ただちに桑原生行の首を大宰府に進送せよという内容の下し文を豊後国につかわした。大宰府に送られた生行の首は、日向国における合戦の日に捕獲した佐伯是基といっしょに官に進るために暫く大宰府に逗留せしめられ、是基といっしょに官に進上した。ここにみえる桑原生行は、安閑二年紀にみえる豊国の桑原屯倉の桑原を苗字の地とする豊後の豪族であろう。延応二年四月六日の尼深妙所領配分状にみえる桑原、正平九年十二月七日の平行宗寄進状にみえる桑原上下はその遺称地と思われる。

十二月二十九日、佐伯是基は生きながら左衛門府に将来せられ、ただちに検非違使に仰せて左獄所に下した（以上『本朝世紀』）。その後の佐伯是基については確かな史料はなにも残されていないが、この佐伯是基を大神系図にみえる惟基とする説がある。

久寿三年（一一五六）六月十一日、由原八幡宮宮師僧院清は解状を官長に上り、由原社内の桑五十本を帽額ならびに法服料として、また畠地を毎年三箇度の行幸拂除料として、宛下されん事を申請し、散位大神朝臣某がその外題に署名している。

鳥羽院の時、由原八幡宮の大宮司大神廣房は勅勘を蒙り贈左大臣家時信卿がこれを拝領したという。

治承三年（一一七九）佐伯惟家がはじめて領家より由原八幡宮の下司職に補されたという。

筑後国山門郡原町村太田吉蔵蔵本「大神系図」には、惟基の長男高智保を三田井太郎とし、由布院・吉野の祖とある。次男惟季は阿南次郎として阿南・惟任・松尾・小原・大津留・武宮・橋爪・早稲田・田尻・入倉・十時などの祖とし、三男季定を稙田七郎太郎とし、四男基平は大野八郎とし、大野・大牟田・朽網・敷戸などの祖とある。そして五男惟盛は緒方九郎大夫となっており、不思議なことにどこにも大神姓を継承した痕跡がない。さらにその後の子孫をみても、季定の子孫に麦生・吉藤・太田・野津原・光吉・上義・行弘・重国・田吹・佐伯・熊崎・二宮・高松・甲斐田などかみえ、惟盛の子